

河北町のおひなさまの特色

江戸時代に河北町が誇った最上紅花交易によって、京都からもたらされた京文化のひとつが雛人形でした。素朴な寛永雛や元禄雛、豪華な享保雛、有職雛、古今雛や次郎左衛門雛など京や江戸の雛が河北町の旧家には数多く保存されてきました。

これらの珠玉の時代雛を約30点、年代を追ってご覧いただけるよう展示いたします。これほどに時代別の雛が残っているのは、県内でも珍しく、個々のお宅で雛を代々大切に受け継いできたからと言えるでしょう。

大切に保存されてきた華麗な「ひな文化」をどうぞご鑑賞ください。

期 間：平成24年1月10日(火)～4月3日(火)

《開館時間》 1月～2月 午前9時～午後4時

3月～4月 午前9時～午後5時

《休館日》 毎月第2木曜日

会 場：河北町紅花資料館 武者蔵・紅の館

(河北町谷地戊1143 TEL0237-73-3500)

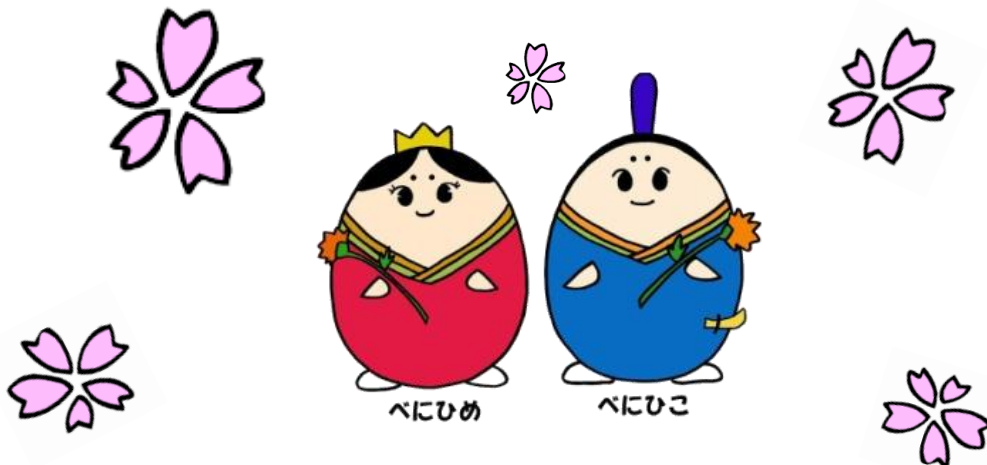
紅花資料館入館料

一般：400円 高校生：150円 児童生徒：70円

(20名様以上団体割引あります)

年間入館券(A)…2,000円 1回につき5名様まで入館できます。

年間入館券(B)…1,000円 1回につき2名様まで入館できます。



へにひめ

へにひこ

紅花資料館企画展 時代雛特別公開

「紅花文化とおひなさま展」

主 催：河北町観光協会

共 催：河北町・河北町教育委員会

紅花資料館企画展 時代雑特別公開

「紅花文化とおひなさま展」

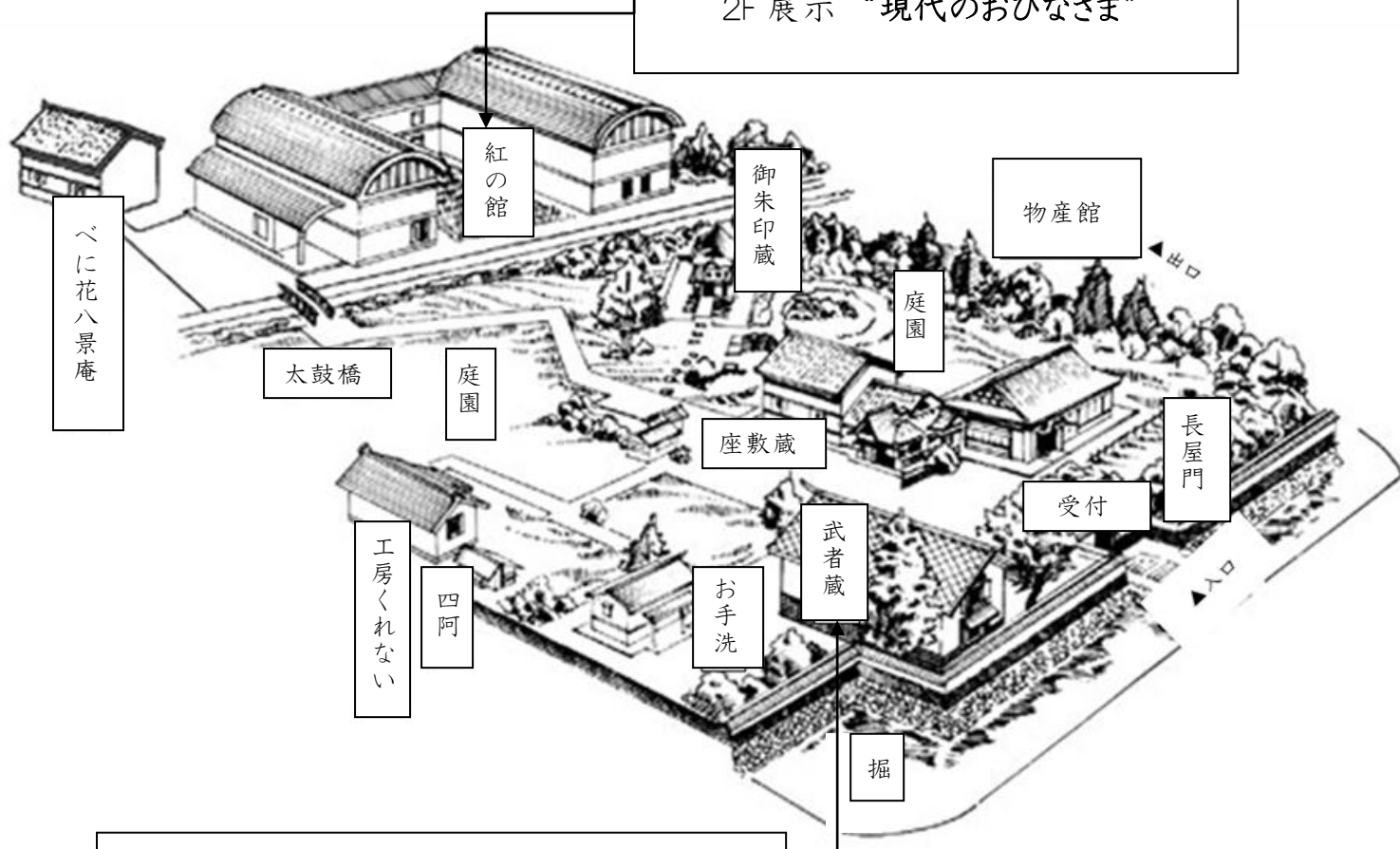
— 展示会場図

第二展示会場:「紅の館」

1F 展示 “紅染めとおひなさま”

紅染め衣装、享保雑ほか

2F 展示 “現代のおひなさま”



第一展示会場:「武者蔵」

1F 展示室 “時代ごとのおひなさま”

立雑、寛永雑、元禄雑、享保雑

古今雑、次郎左衛門雑、有職雑 ほか

おひなさま説明

たちびな 立雛

雛の発端は、和紙で作られた流し雛から室町期の立雛に始まり、寛永頃全盛期を迎えますが、次第に装束をまとった座雛へと移っていきます。右側の立雛は桃山時代～江戸初期と思われる本町で最も古い雛です。

かんえいびな 寛永雛

江戸初期の寛永期(1624～)に作られた、座雛の始まりといわれる雛です。男雛の冠と頭はまだ一木造りで、女雛は天冠を着けていません。

げんろくびな 元禄雛

元禄期(1688～)には、寛永雛をさらに整えた形の雛が作られました。男雛の頭は寛永雛に共通しております。

きょうほびな 享保雛

八代将軍吉宗時代の享保期(1716～)頃の雛で、元禄雛の流れを汲み、享保文化の隆盛とともに豪華絢爛を競っていきます。面長の優美な表情に金襴や錦の装束を用いて、男雛は袖を張り、女雛の袴はふくらみを持たせ、大変豪華な作りです。その豪華さから度々幕府のお触れにより製造が制限されました。

ゆうそくびな 有職雛

宝暦期(1751～)頃から作られた雛で、公卿の装束を有職故実くぎょうに基づいて正しく人形化したものです。

装束によって「衣冠雛いかん」「狩衣雛かりぎぬ」「直衣雛のうし」の3種類があります。

じろうざえもんびな
次郎左衛門雛

幕府の御用人形師に迎えられた京都雛屋次郎左衛門が有職雛に着想を得て江戸後期に作ったものといわれ、丸顔・引き目・おちょぼ口が特徴です。大名家に人気を集め宝暦期に武家社会で流行しました。

こきんびな
古今雛

昭和期(1764～)頃に上野池端の大槌屋が原舟月に作らさせたものが始まりといわれ、写実的な容姿と見た目のきれいな装束で流行し現代雛の原型といわれます。当初は頭が木地彫に切り目でしたが、需要の増加とともに彫塑に改良され、両眼に瑠璃玉(ガラス)をはめこんだものもあります。

さんにんかんじょ
三人官女

江戸後期、内裏雛の添え雛と雛壇に飾られるようになります。中央の官女は留袖の既婚者で嶋台を持ち、両脇は振袖の未婚者で銚子を持ちます。

ごにんばやし
五人囃子

江戸後期、壇飾りの様式がにぎやかになると、内裏雛の添え雛として作られたといわれています。

ごしょにんぎょう
御所人形

江戸中期頃から宮中で愛玩用や贈答用に作られたといわれ、木彫や桐塑とうその本体に真っ白な胡粉を塗り重ねています。大きな頭に丸々とした幼児の姿をしています。

